

グリーンツーリズム実践に向けた活動モデルの構築とその適用
 - 栃木県那須町を事例として -

Feasibility study of modeling based on review of green tourism
- A case study of Nasu Town , Tochigi Prefecture -

○ 結城寿人*, 田村孝浩**
 ○ YUKI Hisato, TAMURA Takahiro

1. はじめに 近年、農山村と都市が交流する取り組みとして、グリーンツーリズム(以下 GT と略)が各地で積極的に取り組まれている。中村(2007) ¹⁾はGT 実施上の問題を整理し、GT の導入コスト低減を図る上で地域資源を有効活用することの重要性を指摘した。しかし、これまでに、地域に潜在する資源をどのような主体が活用・運営し、具体的な GT 活動へと展開していけばよいのか、その方法論は確立されていない。

そこで本研究では、既存の GT 活動を類型化した上で、その運営主体と地域資源を関係づけた GT の活動モデルの構築を行なう。また研究対象地域を設定し、当該地域における地域資源賦存量を把握し、これを構築した GT 活動モデルに適用することで、対象地域における GT 活動パターンや地区を具体化することを試みることを目的とする。

2. 研究の方法 図 1 に研究のフローを示した。まず研究対象地域を選定し、研究対象地域内の資源の把握を行なう。また既存の GT 活動を基に、活動パターン、並びに運営主体を利用資源と関係づけた GT 活動モデルを作成する。地域資源をモデルに当てはめると、それぞれの GT 活動を実践できる適合地区の判別が可能になる。適合地区の判別に当たっては GIS を用いて、主要交通網、資源の分布密度、資源の多寡を重ねた空間データベースを作成し、GT 活動に必要な資源の賦存状況から判別を行なった。なお資源の多寡は数値化し等級色で表現することとした。また、各 GT 活動が実践可能と推定された地区において、具体的な行動モデル(行程表)の作成を試みる。

3. 結果 (1)活動パターン・運営主体の分類 GT 活動に関する既往文献・資料に掲載された 54 事例から、活動パターンと運営主体の類型化を行った。活動パターンは、滞在期間や活動内容によって 6 つに類型化した(表 1)。運営主体については行政、農家、民間企業の 3 つ主体が存在しており、それぞれ単体もしくは複合体として GT 活動に関係していることが明らかとなったことから、その関係を図 2 のように模式化した。

(2)モデルの構築 GT 活動に関する既往文献・資料に掲載された 54 事例から、図 2 に示した主体が GT 活動を運営していく際に必要と考えられる資源を抽出し、それぞれの関係を GT の活動モデルとして

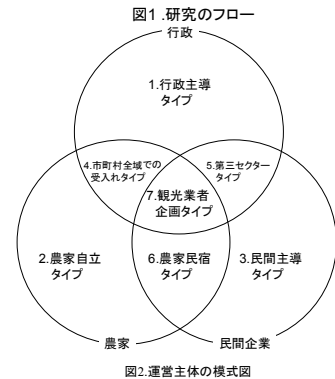
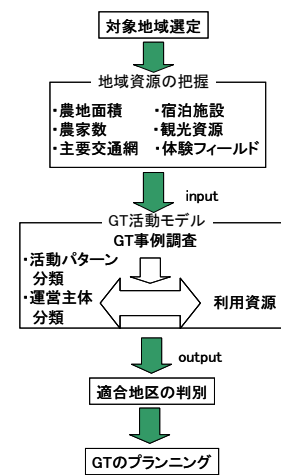


表1. 活動パターン分類

パターン	滞在形態	特徴	活動内容
A	日帰り	農業体験重視	日帰り型GTで、農作業体験を行なう
B	日帰り	買い物、食事、加工体験、自然体験	日帰り型GTで、農産物購入や食事を行なう
C	日帰り	教育重視	学生の教育の一環として、日帰り型の農村体験
D	宿泊	農業体験重視	滞在型GTで、一貫した農作業体験+宿泊は既存宿泊施設もしくは代替宿泊施設
E	宿泊	農業+観光、加工体験、自然体験	宿泊型で、その他に観光、加工体験、自然体験を行なう
F	宿泊	教育重視	学生の教育の一環として、宿泊型の農村体験

*那須町農林振興課 Nasu Town. Dept. of Agriculture and Forestry promotion

**宇都宮大学農学部 Utsunomiya Univ. Faculty of Agriculture.

キーワード: グリーンツーリズム, GIS, 地域資源, 実践可能性

一覧表に整理した(表2)。それぞれの活動パターンに必要な資源を、運営主体毎に比較したところ顕著な相異はみられなかった。

(3) 那須町での GT 活動モデルの適用 現地調査および関係資料を収集し、対象地区における賦存資源を空間データベースとして整理した。なお抽出した地域資源は、先行研究¹⁾と同様のものとした。この空間データベース上においてモデルを適用し、各々の活動パターンに必要な資源の賦存状況を確認した。その結果、日帰り農作業重視型パターンについては、観光農園の分布密度が高い「高久甲地区」において実践可能性が高いと判別できた(図3)。同様にパターンEとFについては、「高久甲地区」や「高久乙地区」、「高久丙地区」において実践可能性が高いと判別できた(図4～5)。続いて、実践可能と判別された地区内における具体的な活動モデルのプランニングを行った。プランニングに際しては、自家用車を利用するものと仮定し、日帰りの場合には那須 IC から、宿泊の場合には宿泊地から5km 圏内にある施設を対象とした。その結果、表3～5に示すような行動モデルを作成することができた。

4. 考察 全ての活動パターンについて実践可能な地区を判別したところ、東北本線よりも西側に集中している傾向にあり、東側の地区では実践可能な活動パターンや地区は特定されなかった。しかし、東側の地区である「芦野地区」においても行動モデルを作成することの可能性が示された。これは把握した資源の選択に限界があったこと、すなわち資源の量のみならず質的な要素も組み入れ、モデルに反映させる必要があると考えられた。

5. まとめ 本研究では既往事例を参考とした GT 活動モデルを作成し、これを那須町で適用することにより、具体的な GT 実践地区や活動パターンを把握した。しかし本研究で作成した GT 活動モデルには、資源の質が反映されておらず、モデルとしては不完全であると考えられる。今後の課題として、資源の量的な面と質的な面の双方向から、適合地域の判別が可能な、高精度のモデル作成が挙げられる。

表2.GT活動モデル

活動パターン	運営主体(法人)	1.行政	2.農家	3.民間企業	4.行政+農家	5.行政+民間企業	6.農家+民間企業	7.行政+農家+民間企業
A.日帰り農作業重視	観光農園	観光農園	体験農園、農家(指導者)、農地	農業体験施設、農地、指導者	農地、観光農園	農地、指導者	観光農園	体験農園、農地
B.日帰り複合型	体験農園、体験施設	観光資源、体験施設、農家(指導者)	農業体験施設、観光資源、体験施設	体験施設、観光資源、体験施設	体験施設、観光資源、指導者	体験施設	体験施設	体験施設
C.日帰り教育重視	農地	農地、体験施設、農家(指導者)	農地、農家(指導者)	農地、農家(指導者)	体験施設、指導者	体験施設、指導者	—	—
D.宿泊農作業重視	宿泊施設、体験農園	農地、農家(指導者)、宿泊施設	宿泊施設、体験農園、農地、指導者	宿泊施設、農地、指導者	農地、農家(指導者)、宿泊施設	宿泊施設、体験農園、農地	宿泊施設、農地、農家(指導者)	宿泊施設、体験農園、農地
E.宿泊複合型	宿泊施設、体験施設	宿泊施設、体験施設、指導者、観光資源	体験施設、宿泊施設、農地、指導者、観光資源	体験交流、宿泊施設、農家(指導者)	宿泊施設、観光資源、農地、指導者、体験施設	宿泊施設、体験農園、農地	宿泊施設、農家(指導者)、指導者	観光資源、農地、農家(指導者)、宿泊施設、体験施設
F.宿泊教育重視	農地、農家(指導者)	農地、農業体験施設、宿泊施設、農家(指導者)	宿泊施設、農地、指導者、体験施設	宿泊施設、農地、農家(指導者)	体験施設、農地、農家(指導者)	指導者	農地、農家(指導者)、観光資源、体験施設、観光農園	—

※—は該当事例が見つからなかった

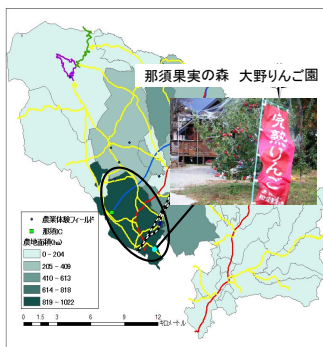


図3.日帰り農作業重視型の適合地域

表3.日帰り農作業重視型の行程表

「日帰り、りんご狩り体験」
 交通手段:自家用車
 人数:1人～
 内容:●那須ICから移動(10分)
 ●「那須果実の森 大野りんご園」でのりんご狩り(30分)
 ●那須ICへ移動(10分)
 料金:入園料なし。
 りんご1kgに対し500円の料金
 使用資源:農業体験フィールド(観光農園)

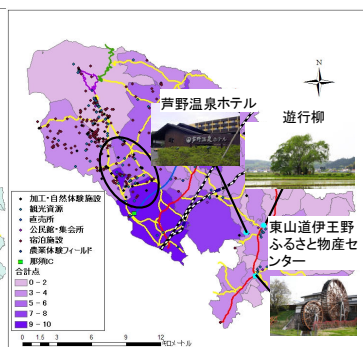


図4.宿泊複合型の適合地域

表4.宿泊複合型の行程表

「芭蕉と歩く芦野・伊王野史跡めぐり」
 交通手段:自家用車
 人数:1人～
 内容:1日目 ●国道294号線＝伊王野地区 ●道の駅「東山道伊王野」で蕎麦打ち体験&昼食(5時間)＝●伊王野の里、史跡めぐり(2時間)＝●芦野温泉入浴(2時間)＝●芦野温泉ホテルに宿泊
 2日目 ●芦野地区史跡めぐり(3時間)＝●道の駅東山道伊王野にて買い物(1時間)＝●294号線で帰途
 料金:約13000円
 使用資源:直売所、観光資源、旅館

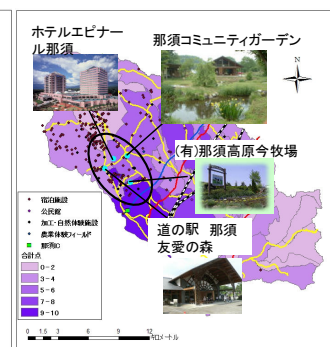


図5.宿泊教育重視型の適合地域

表5.宿泊教育重視型の行程表

「那須町でのGT型修学旅行受け入れ」
 交通手段:大型バス
 人数:30人～
 内容:1日目 ●那須ICから移動(5分)＝●(有)那須高原今牧場での酪農体験(3時間)＝●ホテルエピナル那須で宿泊
 2日目 ●ホテルエピナル那須＝●ホテルエピナル那須が主催している収穫体験(2時間)＝●那須友愛の森で昼食(1時間)＝●那須コミュニティガーデンでの加工体験(2時間)＝●那須ICへ移動(5分)
 料金:約15000円
 使用資源:ホテル・農地・農家・体験施設・道の駅

参考文献 1) 中村佳史 那須野ヶ原地域を対象としたグリーンツーリズムの実践可能性の評価(2007年農業環境工学科卒業論文)